

近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分

宮本一夫

1 はじめに

西日本の早期末から前期初頭にかけては、最近関東でも議論が盛んである分期間題を含めて、不明な点が多い。近畿でいえば、石山式から羽島下層Ⅱ式にかけて、瀬戸内では、羽島下層式の設定の是非を含め、羽島下層Ⅰ式からⅡ式に於て、山陰では、菱根式から羽島下層Ⅱ式にかけて、土器変遷上の明瞭な解釈はもたれていない。また、該期の土器型式の推移は、1965年の『日本の考古学Ⅱ』の段階と大きく変わっていないといっても過言ではないであろう。しかしながら、近年、新型式土器群の出現など、これらの沈滞した研究状況を打ち破る曙光がさしつつある。例えば滋賀県栗津湖底遺跡出土のSZ土器群⁽¹⁾、あるいは層位別資料を含む山陰の該期の資料の増加である。さらに、東海との関係を考える上で良好な共伴資料である福井県鳥浜80RⅠ区の土器群⁽²⁾などは、近畿以西の土器群を関東や東海との関係で捉えることを可能にしている。このように、早・前期の分期間題をも含め、西日本の縄文土器は、関東・東海との同一テーブルで論ぜられる状態が形成されつつあるといえよう。

こうした場合、該期の土器群を再度、地域別に振り返る必要がある。さらに、それらの土器群を共通の目で細分することも急務である。土器細分こそ、該期の土器型式の推移を理解する上で必須の作業と考えるからである。こうして、土器細分による地域間比較により、土器型式の推移と地域的展開を認識しようとするものである。その際、個々の地域でそれぞれ個別の型式名がつけられているものの、近密な類似性が認められ、同一型式名で把握してよいものがみられる。例えば、近畿の北白川下層Ⅰ式は瀬戸内の羽島下層Ⅲ式に、近畿の北白川下層Ⅱa・Ⅱb式は瀬戸内の磯ノ森式に対応し、同一型式群と捉えて不都合のないものである。また、羽島下層Ⅱ式とここで呼ぶものは、従来、鎌木義昌が細分した土器群と異なり、網谷克彦が施文原体の特徴から設定した土器型式である⁽³⁾。岡田茂弘がかって北白川下層Ⅰa式としたものの中に含まれるが、この中から2連単位の刺突文を抽出して、羽島下層Ⅱ式としたものである。これにより、北白川下層式の爪形文の展開を明瞭に説明しえたのである。とともに、この網谷の細分による羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅱb式に至る型式変化は、近畿、瀬戸内、山陰における型式変化に適合しているものと

考える。すなわち、この段階は、近畿、瀬戸内、山陰に斉一的な土器変化がみられるのである。こうして再度問題提起すべきは、羽島下層Ⅱ式以前の土器群をどう考えるかということにある。まずは、個々の地域の土器細分から始めたい。

2 近畿の様相

近畿を論ずる場合には、北部地域と南部地域を区別する必要があるであろう。北部地域は、山陰と北陸との交流が密であるからである。従って、北部地域に関しては、後に山陰を論ずる際に論究する方が妥当であろう。

さて、南部地域の早期末から前期初頭にかけての土器型式は、1965年の岡田茂弘の段階では、石山式(石山Ⅶ)→安土N上層式→北白川下層Ⅰa式という土器型式の推移が設定され、早期と前期の境を石山式と安土N上層式の間に置かれている⁽⁴⁾。この考え方は、安土N上層式の実態が明瞭でないため、その後の編年表の作成に於ては、安土N上層式を削除する形で、石山式から北白川下層式にかけて土器型式が空白となっている。最近では、この間に、鳥浜80RⅠ区12層上面出土土器(以下、鳥浜80RⅠ区と略称する。)や羽島下層Ⅱ式を置く考え方がある。後者の場合、羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰa式への変化過程は、網谷克彦によって、鳥浜貝塚の資料をもとに、施文方法や施文具の変化によって明解に説明されている。一方、鳥浜80RⅠ区の設定は、東海の土器型式の推移にもとづくものである。すなわち、この土器群の中に、東海の前期初頭である清水ノ上Ⅰ式が含まれることによる⁽⁵⁾。ただ、どちらも鳥浜貝塚という近畿北部地域の資料⁽⁶⁾をもとにしており、南部地域の編年にあてはまるかが問題となる。しかしながら、羽島下層Ⅱ式に関しては、南部地域にも広く分布し、羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰa式への推移も認められる。とすれば、羽島下層Ⅱ式の前段階に、鳥浜80RⅠ区をおくことが可能かが、次の問題となる。ところで、再度、岡田茂弘の段階に立ち戻ってみよう。空白型式の段階には、京都市左京区一乗寺向畑町遺跡南部地区の土器群が関連するのではないかとしている。そこで、この問題となる土器群について概観してみよう。

一乗寺向畑町遺跡⁽⁷⁾は、北部地区、中央地区、南部地区の3地区に分かれており、地区別に土器型式が異なっている。この内、北部地区と中央地区は後期の土器が出土している。問題となる南部地区(以下、一乗寺南地点と略称する。)は、概報では、早期末とされ、北白川下層諸型式に先行し、Ⅰ型式の土器群とは言いきれないものとされる。今日改めてそれら土器群を細別すれば以下の如くとなる。

近畿の様相

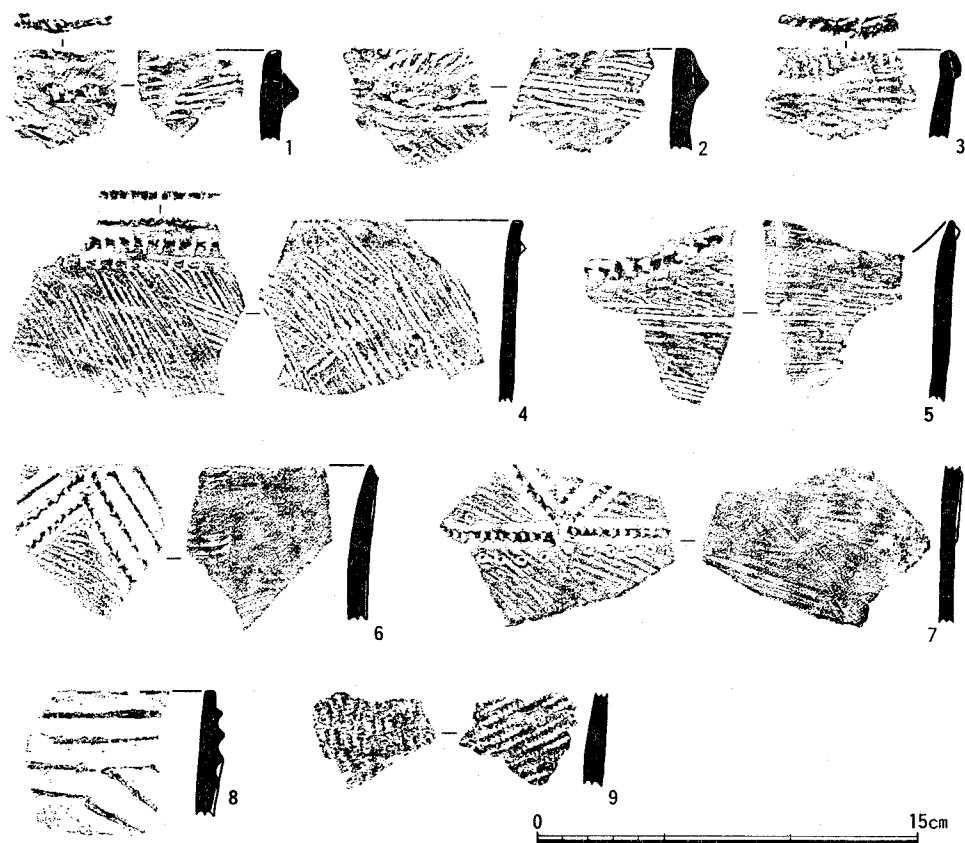


図29 一乗寺南地点出土縄文土器（1～3Ⅰ式，4・5Ⅱ式，6・7Ⅲ式，8Ⅳ式，9表裏縄文土器）縮尺1/3

一乗寺南地点の土器は大きく2大別できる。条痕地を中心に口縁下に隆帯を施すものと、表裏縄文を施すものである。前者の条痕地のものの方が、縄文地のものより、出土量的には優位なあり方を示す。口縁下に隆帯を施すものは、4型式に細別できる。

Ⅰ式：口縁直下または口唇に接して1条の平行隆帯を貼りつけ、条痕調整を施すもので、口唇部を貝殻腹縁によって刻むものや、内面を撫で消すものがある(図29-1～3)。

Ⅱ式：内外面条痕調整を施し、その後口縁直下に1条の平行隆帯を貼りつけるもので、隆帯には刻み目を施す。この内、刻目隆帯の直下には1条の押し引き刺突文を施し、かつ口唇部を刻むものがある(同4)。また波状口縁をなすものもある(同5)。

Ⅲ式：条痕調整の後、幾何学的に微隆帯を貼りつけ、隆帯上を刻んだり、竹管文を施すものである(同6・7)。

Ⅳ式：口縁直下に数条の平行隆帯を施し、平行隆帯下にさらに斜方向の隆帯を施すもので、条痕調整はみられない。また、口唇部は丁寧に面取られている(同8)。

これら隆帯を特徴とするⅠ～Ⅳ式の内、Ⅰ～Ⅲ式は条痕文を特徴とするものである。条痕文は、近畿の場合、早期後葉の鶺鴒ヶ島台・茅山下層式併行期以降から、前期前半の北白川下層式段階までの一連の系譜過程をなす調整法である。羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰ式という連続した型式変化のあり方と、一乗寺南地点の土器群のあり方を差し引きすれば、少なくともこれらⅠ～Ⅳ式は羽島下層Ⅱ式以前の土器群とすることができよう。また、このⅠ～Ⅳ式の類例を呈示するならば、Ⅱ式が兵庫県芦屋市山芦屋遺跡⁽⁸⁾、Ⅲ式が山芦屋遺跡や和歌山県伊都郡船岡山遺跡⁽⁹⁾にみられる。Ⅱ式はさらに瀬戸内の羽島下層式の中にも認められる。

ここで、早期末から前期初頭にかけての土器型式の推移を示す滋賀県大津市石山貝塚⁽¹⁰⁾など、琵琶湖湖岸の諸遺跡について眺めてみよう。これらの諸遺跡は、東海地方の土器型式に対応する土器群を包含している。石山貝塚では茅山下層式から石山式に至るまで、滋賀県坂田郡米原町磯山城遺跡⁽¹¹⁾では、鶺鴒ヶ島台式から清水ノ上Ⅰ式に至るまで、東海の該期の諸型式と同一の土器群が出土している。この情況は、滋賀県大津市栗津湖底遺跡でも同様なあり方を示すようである。ただし、栗津湖底や磯山城では、新型式の刺突文系の土器群として、東海の塩屋式から清水ノ上Ⅰ式にかけての早期末前期初頭に位置づけられる土器群が存在する。これが、栗津湖底や磯山城でSZⅠ群として捉えられている土器群である。

こうして琵琶湖南岸の遺跡群の土器型式の推移からは、栗津SZⅠ群という東海に認められない型式群が存在するものの、清水ノ上Ⅰ式に至るまでは東海とほぼ同様なあり方を示している。これに対し、今問題にしている一乗寺南地点のⅠ～Ⅳ式の存在は認められない。同様に、鳥浜80RⅠ区の頸部のくびれ部に2条単位の刺突文を施す土器⁽¹²⁾も認められない。また、一乗寺南地点のⅡ・Ⅲ式の分布や瀬戸内との関係を考えるならば、Ⅰ～Ⅳ式は琵琶湖南岸での未確認型式群というよりは、該期における近畿南部地域の土器型式の地域圏の差にもとづく可能性がある。すなわち、琵琶湖岸以東と以西の地域差が存在する可能性がある。とともに、これらⅠ～Ⅳ式の位置づけは、単純に東海の土器型式の推移の中では押さえ難い。一方、この一乗寺南地点にみとめられる表裏縄文土器(図29-9)は、繊維を含むものは認められず、器壁もやや薄い。山陰から近畿北部に分布し、早期末とされる表裏縄文土器に類似し、出自はこれらの地域との関連で求められる可能性がある。

以上のような一乗寺南地点のあり方は、琵琶湖岸以東のあり方とは異なり、琵琶湖岸以

近畿の様相

西に類例が認められるとともに、近畿北部地域との一定の関係も想定できる。そこで、さらに近畿南部地域を2分して考える必要があり、琵琶湖以東を南東部とし、琵琶湖以西を南西部と称して、区別してみよう。近畿南東部は、羽島下層Ⅱ式以前では、東海との緊密な関係を維持している。従来問題とされてきた安土N上層式は、東海の木島式に類似するものと考えられるようであり、問題は⁽¹³⁾ない。ただし、早期末前期初頭の新型式土器として粟津湖底S Z I群が存在している。一方、近畿南西部地区では、羽島下層Ⅱ式以前のものに一乗寺南地点のⅠ～Ⅳ式があげられる。Ⅰ～Ⅳ式の一部は、山芦屋や船岡山でも出土しているようであり、少なくとも山芦屋の出土状況からすれば、高山寺式以降のものである。ひとまず近畿南部の状況は、南西部と南東部の区別をする必要があることを提起し、南西部に関しては、瀬戸内の状況を整理してから、再考する必要があるだろう。

3 瀬戸内の様相

早期末から前期初頭の問題となる土器型式に、羽島下層式がある。瀬戸内沿岸部では、黄島式以降、東海・近畿南東部のように繊維を含む条痕文系土器群は発見されておらず、羽島下層式まで土器型式の確認されたものはない。瀬戸内内陸部である中国山地の帝釈峡では、押型文土器の高山寺式以後、所謂繊維土器が出現する。条痕のないものから条痕地のものへ、そして条痕調整とともに縄文の施されるものへの変化が示される。⁽¹⁴⁾それぞれ観音堂18D→観音堂17C→観音堂17Bという変化で表されている。観音堂17Cは茅山上層式に対比され、観音堂17Bは山陰の菱根式や近畿北部の宮ノ下式に対比されている。羽島下層式は、これらの繊維土器の後に位置づけられるものである。

このように押型文土器以降の土器型式で、瀬戸内沿岸部、内陸部ともに確認されているものが、羽島下層式である。羽島下層式は鎌木義昌によればⅠ～Ⅲ式に分けられており、Ⅰ式の位置づけが早期末に置かれたり、前期初頭に置かれたりしている。⁽¹⁵⁾一方、このⅠ～Ⅲ式の土器群は、間壁忠彦によれば、羽島貝塚の発掘に於て同一層から出土し、時期差はみられないとしている。⁽¹⁶⁾今日、近畿地方における北白川下層式の細分により、羽島下層Ⅲ式は北白川下層Ⅰ式にほぼ対応しており、分離することは可能である。問題となるのは、鎌木のいう羽島下層Ⅰ・Ⅱ式である。鎌木の分類によれば、Ⅰ式は表裏に条痕が施され、器壁が比較的厚いのに対し、Ⅱ式は比較的器壁が薄く、内面に条痕が富み、外面には貝殻腹縁文や小さな刺突文により施文されるものをさす。しかしながら、この分類は、小片を対象にしているため、明確な定義づけがなされておらず、外面の条痕地の発達の有無

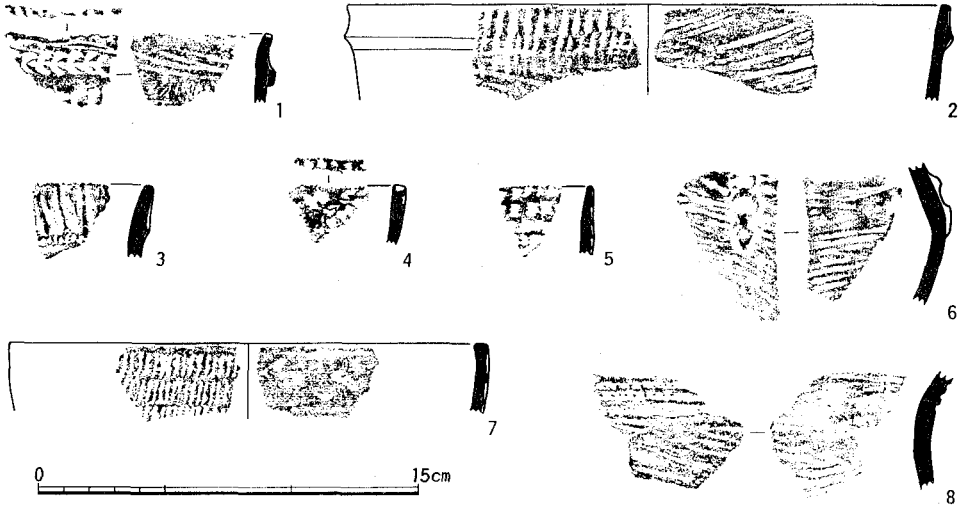


図30 羽島貝塚出土縄文土器(1・2 A類, 3 B類, 6 C類, 4・5 D類, 7 E類, 8 F類) 縮尺1/3

や厚さを基準にしている感がある。しかもこれらは同一個体によっても部位による違いがみられ、明確な基準たりえていない。例えば、口縁下の1条隆帯の上下を刻むものが、I式とII式の両者にみられる点などである。こうした場合、鎌木の定義した羽島下層I・II式が妥当なものであるか、再度吟味する必要がある。今一度、羽島下層式土器について眺めてみよう。

岡山県倉敷市羽島貝塚⁽¹⁷⁾で認識された羽島下層式土器は、数型式の土器群からなっている。近畿の北白川下層I式に対応するIII式を除くと、今問題とするI・II式がほとんどとなる。改めてこれらを細分してみよう。

A類：口縁直下に一条の平行隆帯を施すもの。後の細分ではA₁類とされるものである。隆帯は、口縁外面にたれさがるように段状張り付けを作るもの。断面方形状の突帯をなすもの(図30-1)、低い断面三角形状の突帯部からなるもの(同2)がみられる。また、断面方形状や三角形状の隆帯のものでは、隆帯の上下部分に平行に押し引き状の刺突文帯を2段に施しており、段状張り付け隆帯のものでは、隆帯上を2段に刺突文を施しているものもある。これらA類の内、後の細分では、刺突文帯をもたないものをA_{1a}類、刺突文帯をもつものをA_{1b}類(同1・2)とすることができる。

B類：刻み目平行微隆帯を施し、口唇部から平行微隆帯に向けて垂下隆帯が施されるもの(同3)。

C類：口縁部の様相は不明であるが、胴部が屈曲する形態をなし、屈曲部の上半に押圧を施した垂下隆帯を貼り、その両脇に横長の押し引き文を多条に施すもの(同6)。

D類：長方形の施文原体によって、押し引き文を施すものである。口唇に沿って平行に多条に施すもの(同5)と、斜方向に多条に平行押し引き文を施すもの(同4)とがある。後者の口端部には刻みが存在する。

E類：3の字状の貝殻腹縁による刺突文をなし、この二連規制のある刺突文を、口縁部と胴部に施文位置を分けて施すものである(同7)。

F類：C類と同様な横長の押し引き文であるが、平行押し引き文を施し、E類と同様、口縁部と胴部に施文部位を分けて施文する可能性のあるものをさす(同8)。

これらA～F類の内、E類は網谷克彦の定義した羽島下層Ⅱ式にあたる。F類もE類と同様な文様構成をなすところから、羽島下層Ⅱ式と同時期のものである可能性がある。岡山県浅口郡里木貝塚の発掘資料に於て、羽島下層式土器とされたものでは、北白川下層Ⅰ式(鎌木のいう羽島下層Ⅲ式)とともにE類が主体を占め、僅かにF類と思われるものが存在する。⁽¹⁸⁾羽島貝塚と里木貝塚の羽島下層式を比較すれば、明らかにA～D類とE・F類の区別ができよう。しかも里木貝塚の主体が本稿でいう羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰ式という連続した土器型式を示すところから、A～D類は、網谷克彦の羽島下層Ⅱ式以前の土器群である可能性が高い。

では、A～D類について、他地域と比較しながら眺めてみよう。B類は羽島貝塚では僅か1点であるが、山陰や瀬戸内内陸部の帝釈峽に於ても出土している。それらによれば、B類は口縁が外反気味で、胴部で一度段をなした丸底の深鉢を呈する。器形あるいは文様構成からみれば、九州の轟B式第2類⁽¹⁹⁾に対応しよう。C類も僅か1点であるが、後に詳述する山陰で出土例が知られるもので、陰田第9遺跡第1群土器⁽²⁰⁾を標識とし、山陰に分布の中心がみられるものである。これらB・C類は数量的に限られることから搬入の可能性ないし、他地域の影響と解せられる土器群である。また、D類も出土量が限られているが、近畿南西部の山芦屋に類例が認められるようである。D類の文様構成や施文法は、近畿南東部の粟津湖底SZ1群土器と一定の関係が想定できよう。さて主体を占めるA類は、口縁下に1条の平行隆帯を施し、隆帯を中心に押し引き状の刺突文を施す特徴から、近畿南西部の一乗寺南地点Ⅱ類や山芦屋に類例が認められる。

以上のように、羽島貝塚の羽島下層の分析により、本稿でいう羽島下層Ⅱ式以前のものとして、A、B、C、D類を抽出した。B・C類は九州や山陰の影響の強い可能性がある

ものと想定しておこう。一方、A・D類は近畿にも類例が認められる型式であり、特にA₁類は、近畿南西部から瀬戸内にかけての特徴的な土器型式であることが認められよう。では、このような羽島下層Ⅱ式以前の型式群は瀬戸内内陸部の状況ではどうであろう。

瀬戸内内陸部として、該期の良好な資料を提供するものに、帝釈峽遺跡群がある。中越利夫は、前期前半の帝釈峽遺跡群の詳細な分析を試み、層位差などにより大きく2群に大別できるとしている⁽²¹⁾。それは本稿でいう羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅰ式(羽島下層Ⅲ式)という新しい段階と、それら以外の羽島下層式土器群からなる古段階のものである。さて中越が観音堂、馬渡、戸宇牛川岩陰で行なった土器細分を先の羽島下層式の分類に対応させれば、A～C類をさらに細分することが可能である。その詳細を示そう。A類の内、口縁下に1条の隆帯を口端部とやや間隔をおいて貼りつけるものをA₁類、口縁に段状の肥厚帯ないし口縁に接するように隆帯を貼りつけるものをA₂類とする。さらに、A₁類の内、隆帯を施すだけで刺突文帯をもたないものをA_{1a}類(図31—1～3)、隆帯上に刺突文帯で刻むものをA_{1b}類(同4～6)とする。またA₂類では、隆帯上に刺突文を施さないものをA_{2a}類(同7・8)、隆帯上に刺突文を施すものをA_{2b}類(同9)とする。B類(同11～13)は、胴部でやや段をなしながら外方に開く口縁部を形成する深鉢であるが、その内、微隆帯を刻むものと、刻まないものの別がある。C類(同14)も、B類同様に胴部がいくぶん段状をなす形態を示すものである。段上部の胴部上半に於て、垂下隆帯で区画する区画帯内に、横長の押し引き刺突文で文様を構成するものである。この他、B類と同様に胴部上半に於て垂下隆帯による区画帯内を沈線文でうめるもの(同15)がある。これは、刻み目平行微隆帯や口唇部に接して隆帯をもつ点などからB類とA₂類の折衷的な土器と考えられる。

このようなA・B・C類は、中越が行なった層位的分析により、少なくとも羽島下層Ⅱ式より古い段階のものであることは確かである。また繊維土器より後出することも層位的に明らかである。さらに、横長の押し引き文を特徴とするF類は、羽島下層Ⅱ式のE類同様後出して現われることが層位的に示されている。先の文様構成の推定通り、羽島下層Ⅱ式併行期の在地的土器群としておきたい。一方、A類に関して、瀬戸内沿岸部ではA₁類のみみられたのに対し、内陸部では新たにA₂類が存在している。A₂類は山陰で主体を占めるのに対し、A₁類は近畿南西部から瀬戸内沿岸部に分布している。瀬戸内内陸部がA₁類とA₂類の分布地域の交錯する地帯であることが考えられよう。また、瀬戸内沿岸部や近畿南西部でみられたD類は内陸部では明確なものが認められない。ただし中越が観音堂Ⅳ類c類⁽²²⁾としたものは、D類との関連を想定することもできよう。

瀬戸内の様相



図31 帝釈峽遺跡群出土縄文土器（1～3 A_{1a}類，4～6 A_{1b}類，7・8 A_{2a}類，9・10 A_{2b}類，11～13 B類，14 C類，15 A₂+B類）縮尺1/3

以上、瀬戸内の状況を眺めれば、本稿でいう羽島下層Ⅱ式以前に、A～D類の土器群の存在が認められることになった。次に、A～D類の土器細分が先後関係として現われるものか、あるいは出自を異にするものかが問われるところである。その問題を解く意味でも、同種の土器群の存在が知られる山陰の様相を眺めてみよう。

4 山陰の様相

前期初頭の山陰、特に出雲地方では、九州の轟B式の影響を受けた土器群が存在すると考えられている⁽²³⁾。近年、陰田、目久美、西川津といった遺跡から該期の遺物がまとまって出土している。報告がなされている陰田・目久美について、先に瀬戸内で定義したと同様な型式分類をもとに、詳述してみよう。

鳥取県米子市目久美遺跡⁽²⁴⁾では、前期から後期に至る縄文土器が出土しており、その内、前期が大半を占めている。前期層の内、羽島下層Ⅱ式とそれ以前の前期初頭土器群が、層位的に明瞭に区分できる良好な遺跡である。今問題とする羽島下層Ⅱ式以前の土器群を紹介してみよう。

目久美ではA₂・B・D類が認められる。A₂類は、口唇部に接して1条の隆帯を貼りつけるものである。器形は、口縁がやや外反し、頸部と胴部の境が段状をなして屈曲するものや、その屈曲部分が膨らみ気味の形態をなすものがみられる。これらA₂類は文様をもとにさらに細分できる。口縁に接して肥厚させた段状の幅広隆帯ないし隆帯を貼り、条痕調整のみで文様を施さないものをA_{2a}類(図32—1・2)。隆帯上面にのみ貝殻腹縁で施文するものをA_{2b}類(同3・4)。また、隆帯上に1条の押し引き状の刺突文を施し、その下方から胴部のくびれに至る間を、斜方向ないしハッチング状の刺突文を施す、あるいは、上下に平行刺突文帯を施し、その間を斜向の刺突文でうめるものがみられる。これら幾何学状の文様構成を施すものをA_{2c}類(同5・6)とする。同様に、隆帯上に押し引き状の刺突文を施し、その下方の頸部に同様な平行刺突文帯を多条に施すものをA_{2d}類(同7)とする。

A₂類と同様な器形をなすB類は、胴部に幾何学文様をもつB₁類と、それをもたないB₂類に分けられる。目久美ではB₂類のみが出土している。B₂類は、刻み目隆帯をもつB_{2a}類(同8・9)と、刻み目のない微隆帯からなるB_{2b}類(同10)からなる。B_{2a}類は、胴部で段をなして屈曲するものや、そのなごりを示すものがある。B_{2b}類は数量がごく限られるが、復原できるものは胴部に段をもたない丸底の深鉢である。

隆帯をもたないD類は、文様構成からみれば、A_{2c}・A_{2d}類に近似している。A_{2c}類に

山陰の様相



図32 目久美遺跡出土縄文土器（1・2 A_{2a}類, 3・4 A_{2b}類, 5・6 A_{2c}類, 7 A_{2d}類, 8・9 B_{2a}類, 10 B_{2b}類, 11 D₁類, 12 D₂類）縮尺1/3

類似する文様構成を示すものをD₁類、A_{2d}類に近似するものをD₂類とする。D₁類(同11)は、2条の平行押し引き刺突文帯の間を斜方向のハッチング状の刺突文帯でうめるなど、幾何学状の文様構成をなすものである。D₂類(同12)は、平行刺突文を多条に施すものである。

次に同じく鳥取県米子市にある陰田遺跡⁽²⁵⁾について眺めてみよう。陰田では第1・第7・第9遺跡で縄文土器が出土しているが、ここでは該期の土器群がまとまって出土している第9遺跡について詳述する。

第9遺跡は、報告によると第1～5群の土器群に分けられている。第1群は、横長の押し引き沈線文を特徴とするC類(図33-10~12)にあたる。器形は、口縁がやや外反しながら、胴部が膨らみ屈曲する条痕地の丸底深鉢である。文様帯は、屈曲する胴部上半に限られる。刻みをもつ垂下降帯による区画帯内を、横長の押し引き沈線文によって幾何学的な文様を施すものである。第2群土器は、口縁に接して1条隆帯を貼りつけた条痕地の土器で、A₂類にあたる。これらは2-A、2-B、2-Cの3類に細分されているが、2-A類はA_{2c}類(同6・7)、2-B・C類はA_{2a}類(同1~5)に対応しよう。すなわち、隆帯上に1条の刺突文を施し、その下半の胴部上半に斜向ないしハッチング状の幾何学的刺突文を施すA_{2c}類である。また、口縁隆帯のみで条痕地上に文様を施さないA_{2a}類である。なお、胴部の屈曲部に、弧状をなす微隆帯と1条の刺突文がつくものがあるが、これもA_{2a}類に含めて考える。第3群は、B_{2a}類(同9)にあたる。条痕地に平行刻み目微隆帯を施すものである。なお、微隆帯の退化し、刻み目の痕跡のみが残ったものも含める。また胴部に渦巻状の刻み目隆帯を施すものはB₁類(同8)の可能性もある。第4群は条痕地に沈線文を施すものである。第5群は条痕地のみの特徴を示す。第4・5群は明確な特徴を示さず型式分類をなしえない。第4群は曾畑系のものとされるが、条痕地を有する点など、A~C類の土器群と密接な関係を想定できよう。ともあれ、陰田第9遺跡には、まとまってC類が出土していることに特徴がある。とともに近隣の目久美には、このC類が存在しないことに注目される。

そこでこれらの類別が時期差を示す可能性があるかを、山陰の他の遺跡群との対比から検討してみよう。近年該期の土器群が大量に出土した鳥根県松江市西川津遺跡⁽²⁶⁾や、その他数遺跡の発掘資料・採集資料を対象とし、該期の土器型式の出土状況を比較することにする。なお、西川津のものは未発表資料であり、内田律夫氏の御好意により拝見させて頂いた資料のみを掲げた。従って必ずしも全資料を対象としているとは限らないことを断って

山陰の様相



図33 陰田遺跡出土縄文土器（1～5 A_{2a}類, 6・7 A_{2c}類, 8 B₁類, 9 B_{2a}類, 10～12 C類）縮尺1/3

表8 山陰における縄文前期初頭の遺跡別土器様相

遺跡名	後谷	西川津	竹ノ花	陰田	目久美	上福万
土器型式		A ₁				
	A _{2a}	A _{2a}	A _{2a}	A _{2a}	A _{2a}	A _{2a}
	A _{2b}	A _{2b}			A _{2b}	
		A _{2c}		A _{2c}	A _{2c}	
		A _{2d}			A _{2d}	
	B ₁	B ₁		B ₁		B ₁
	B _{2a}	B _{2a}	B _{2a}	B _{2a}	B _{2a}	
			B _{2b}		B _{2b}	
	C	C		C		C
		D ₁			D ₁	D
	D ₂			D ₂		
		羽島下層Ⅱ			羽島下層Ⅱ	

おきたい。

表8が山陰における該期の遺跡別類別一覧表である。この内、発掘資料は、西川津、陰田、目久美、上福万である。目久美で明らかなように、層位差から、羽島下層Ⅱ式とA・B・D類は区分できる。これは、鳥根県八東郡東出雲町竹ノ花遺跡の分析により、足立克己がA・B類と羽島下層Ⅱ式を区分し、前者を後者より古いものとしたことと合致する。⁽²⁷⁾

一方、鳥取県米子市上福万遺跡のように、A_{2a}・B₁・C・D類のまともりは、A～D類をさらに時期区分できる可能性を示している。上福万の場合、高山寺式以降、表裏縄文に至る早期後葉の土器群が連続して出土しており、A_{2a}・B₁・C・D類はそれらに続く土器群として把握するのが最も妥当である。同時に、ここからは羽島下層Ⅱ式以降の土器型式は出土していない。また、D類としたものの内、口端部がやや外反している点と押し引き刺突文の原体がやや幅広の方形である点、近畿南東部の粟津湖底S Z 1群に近似しているものもみられる。以上の点から、上福万は、前期初頭のあり方としてもより古い可能性を示していると捉えられよう。すなわち、A_{2a}・B₁・C類は、該期のより古い段階のものである可能性をもつ。次に注目すべきは、近隣する目久美と陰田第9遺跡では、D類を除いて、目久美のA_{2d}類と陰田第9遺跡のC類が相互補完的に欠落しているという事実がある。羽島下層Ⅱ式の存在が知られない鳥根県松江市後谷遺跡では、陰田第9遺跡のように、⁽²⁸⁾A_{2c}・A_{2d}類が存在しないがC類は存在している。このようにC類の共伴とA_{2d}類の共伴に別がある点は、このような隣接地域のあり方からしても、分布差としては捉え難く、時期差として捉えられる可能性が高い。後谷や上福万のようなA_{2c}・A_{2d}類を有せずC類を保有している遺跡が、新しい段階の羽島下層Ⅱ式を保有しない点、C類が古い段階に属す可能性を想定できよう。少なくとも、C類はA_{2d}類より古い段階のものと規定できる。同

山陰の様相

時に、A_{2d}類はA_{2c}類より新しい段階に属そう。

では、A₂類の中で、A_{2a}～A_{2d}類の細別は、文様系譜的にどう捉えられよう。先ほどの上福万・後谷と陰田・目久美との比較でも認められるように、A_{2a}・A_{2b}類に比べA_{2c}・A_{2d}類は新しい段階に属す。また、上福万のあり方からすれば、A_{2a}類はさらに前出する可能性がある。先にA_{2c}類はA_{2d}類より前出することを示したが、文様論的には、A_{2c}類の連続刺突文の幾何学的文様から、その幾何学性が崩れ、刺突法の粗雑化もみられる平行刺突文帯のA_{2d}類への変化が想定できよう。同時にこのような文様規制の退化は、のちに現われる羽島下層Ⅱ式の口縁部と胴部に施文帯を分離させた連続平行刺突文帯への変化へもスムーズに繋がるものと思われる。また、目久美で示されるように、口端部に隆帯をもたないD₁・D₂類は、それぞれA_{2c}・A_{2d}類と同様な刺突文の構成であり、これらが同時期である可能性を示している。このように考えてくれば、A_{2c}類の文様系譜は、隆帯のみのA_{2a}・A_{2b}類のあり方から、そこにD類の影響で幾何学文が施され、それが退化してゆく過程が想定できよう。一方C類は、少なくともA_{2d}類以前のA_{2a}・A_{2b}類に共伴し、文様構成的にみれば、A_{2c}類段階まで存在するであろう。C類と同様な胴部に幾何学的文様構成をもつB₁類は、文様の類似から、C類と同時期のものと考えられる。これは、後谷の共伴関係から、B₁類がA_{2c}・A_{2d}類より先行することによっても傍証できよう。以上の位置づけから、C類はB₁類やA_{1c}類またはD₁類の影響を受けて変化していった在地的な土器群と考えられる。また、B_{2a}類はA_{2a}・A_{2b}類段階に属し、A_{2c}類段階まで共伴するであろう。陰田と目久美の比較によれば、B_{2b}類はA_{2c}・A_{2d}類段階と共伴しよう。

このように、山陰の状況によって、A_{2a}・A_{2b}→A_{2c}→A_{2d}→羽島下層Ⅱ式という想定が可能となった。A_{2a}・A_{2b}類の段階には、B₁・B_{2a}類、C類が伴うであろう。ただB_{2a}類に関しては、A_{2c}類段階まで存続する可能性がある。これに対して、A_{2c}・A_{2d}類段階は、同種の文様構成をもつD₁・D₂類が共伴しよう。またB_{2b}類もこの段階に属そう。

こうした先後関係の想定は、東海との併行関係を考える際の1つの目安となる。すなわち山陰のあり方は近畿北部の兵庫県城崎郡神鍋山⁽³⁰⁾にもみられ、近畿北部も山陰と同一地域圏を形成していたと考えられるからである。さらに近畿北部の鳥浜80R 1区12層上面では、口縁はA_{2a}類の特徴をもち、胴部にB₁類の特徴をもつ土器が出土している。この土器とともに東海の前期初頭に位置する清水ノ上Ⅰ式⁽³¹⁾が共伴している。清水ノ上Ⅰ式は、先述した西川津にもみられる。山陰で前期初頭の最も古い段階としたA_{2a}・A_{2b}・B₁・B_{2a}・C類の段階が、東海の清水ノ上Ⅰ式に併行するであろうことを物語っていよう。つぎに、

各地域の時期的併行関係と系譜関係，地域的な特徴について論じていこう。

5 縄文前期初頭の西日本

これまで，各地域単位で早期末から前期初頭にかけて土器型式の細分と，変化方向，位置づけを明らかにしてきた。ここではそれらを総合化することを努めとしよう。それに先だって，近畿から中国地方各地にみられたA・B・C・D類の分布について眺めてみよう。これにより，各類別土器群の主体地域が明らかとなり，編年上の目安になることは間違いないだろう。

A類は，隆帯の口縁への貼りつけ方によって，A₁類とA₂類に分けられる。A₁類は口唇からやや下がったところに1条の平行隆帯をつける。器形は完形が知られないため明らかではないが，砲弾形の深鉢である可能性が高い。一乗寺南地点のⅡ式も，このA₁類と一致しよう。A₂類は，口唇に接するように1条隆帯を貼りつけ，胴部で段をなして屈曲するか，あるいは胴部がやや膨らみ気味の深鉢形を呈する。図34に示すように，A₁類は近畿南西部から瀬戸内にかけて分布している。一方，A₂類は山陰を中心に分布しており，A₁類とは明らかに分布の差を示している。

B類は，胴部に幾何学的文様をもつB₁類とそれをもたないB₂類に分けられるが，胴部まで形態の明らかな個体が少ないこともあって，B₁類は少ない。B₂類は，瀬戸内，山陰，近畿と広範な分布を示している。B類と同様な形態や特徴を示す土器群は，轟B式第2類として九州に広くみられる。なお潮見浩が隆帯文土器A群としたものは⁽³²⁾このB類にあたる。また，胴部のみで判断に苦しむが，近畿北部の神鍋山では，胴部上半に沈線による幾何学文様を施したものがみられ，B₁類に属するものと思われる。鳥浜80R I区や帝積映観音堂では，口縁に微隆帯をもち，胴部が屈曲する器形で，胴部上半に沈線による幾何学文を施すものが存在する。A₂類とB₁類の折衷的な様相を呈していると考えられる。文様的にB₁類ならびにA_{2c}類に類似するC類は，横長押し引き文を特徴とする。出土点数からみて，山陰を分布の中心としていると考えられる。

施文原体が方形をなし，口縁部に幾何学的ないし平行線状の押し引き文を施すD類は，瀬戸内東部，山陰，近畿北部にみられ，近畿南西部にまで分布しているようである。近畿南東部に分布する粟津湖底SZ1群は，同様な文様帯をもつ条痕文土器であるが，施文原体がD類に比べ幅広く，口縁も外反気味である点，D類と異なっている。粟津湖底SZ1群土器に近似するものは，近畿北部の神鍋山や山陰の上福万にも存在しており，D

縄文前期の西日本

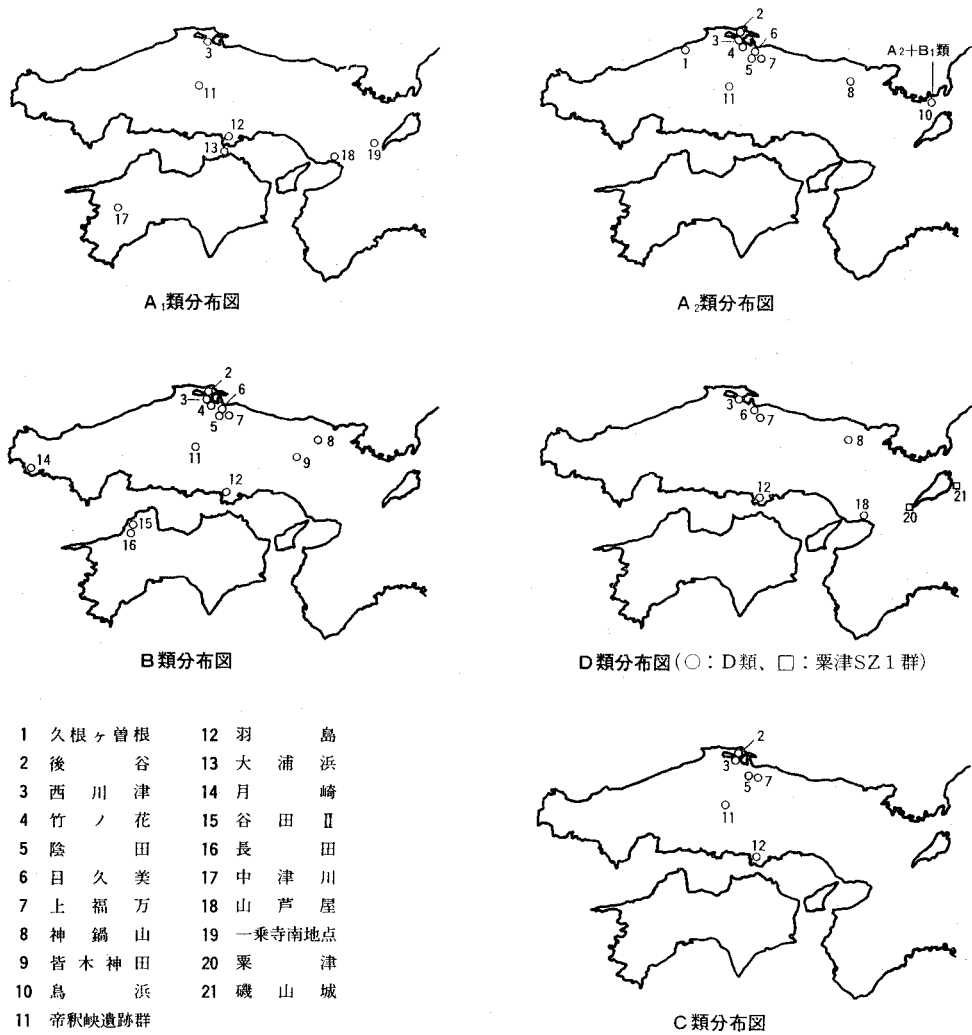


図34 類別による遺跡分布図

類と粟津湖底SZ1群は同じ系譜にあたる土器群と考える。

以上のような分布差をまとめるならば以下のようになる。近畿南東部の粟津湖底SZ1群と、これに類似し、近畿南西部から近畿北部、中国地方東部にかけて分布するD類。九州から中国地方、近畿北部にかけて分布するB類。そして、両者の中間地帯的な分布状況を示すA₁・A₂類がある。しかも、A₁類は瀬戸内沿岸部を主体とし、A₂類は山陰を主体とする対峙した状況が見出される。同様に、B₁類と胴部文様構成が類似するC類も山陰

近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分

表9 縄文前期初頭土器編年表

地域	近畿北部	近畿南東部	近畿南西部	瀬戸内	山	陰
土器型式	A ₂ +B ₁ 清水ノ上I式	栗津SZI群	I	A _{1a}	A _{2a} B ₁	C
			II D	A _{1b} D	A _{2b} B _{2a}	C D ₁
					A _{2c} A _{2d} B _{2b}	D ₂
	羽島下層II	羽島下層II	羽島下層II	羽島下層II	羽島下層II	

を中心に分布し、A₂類とB₁類の折衷的な土器は、近畿北部の鳥浜貝塚まで達している。

このような分布差を明らかにした後、再度、編年の問題に立ち返ってみる。近畿から瀬戸内・山陰における土器型式の併行性を表したものが表9であり、それを図式的に表現したものが図35である。

瀬戸内内陸部の帝釈峡遺跡群や山陰の西川津では、A₁・A₂類が共伴しているところから、先に示したように、A₁・A₂類は分布差として存在し、ほぼ同時期のものと想定できよう。ところで、山陰に於て、A～D類土器群を時期的に細分し、土器の変化方向を想定してきた。この時期細分は、近畿南西部や瀬戸内におけるA₁類の場合にあてはまるであろうか。A₁類をA_{1a}・A_{1b}類に細分したが、瀬戸内沿岸部の羽島下層で分類したA類は、細分上、A_{1b}類にあたる。また、近畿南西部の一乗寺南地点のII類は、A_{1b}類とほぼ等しく、A_{1b}類の範疇に属するものと考ええる。一方、1条隆帯のみで刺突文を施さない特徴を基準にすれば、一乗寺南地点のI類はA_{1a}類ないしA_{2a}類に対応しよう。この場合、条痕地のみA_{1a}類から、刺突文をもつA_{1b}類への変化を、山陰の変遷過程から想定できよう。ただ山陰のように、刺突文にみられる幾何学状文から平行線文への変化の内、A₁類には幾何学状文が存在しないところから、このA₁類の変化過程の想定に問題が残ろう。しかし、近畿南西部の一乗寺南地点の土器型式群と山芦屋のそれとの比較でみれば、一乗寺南地点にのみI式や表裏縄文がみられ、これらが古相を示す可能性がある。その点からも、I式に併行するであろうA_{1a}類とII式に併行するA_{1b}類には、時期差を考慮することができる。I式とA_{1a}類を山陰のA_{2a}・A_{2b}類の段階に、II式とA_{1b}類を山陰のA_{2c}・A_{2d}類の段階に併行するものと考えたい。A_{1b}類の内、多段に施される平行押し引き状刺突文帯をもつものは、A_{1b}類の中でもより後出するものであり、文様系譜的には羽島下層II

小 結

式につながるものと考えられる。また、D類は、山陰のあり方や一乗寺南地点に存在しない点から、A₂c・A₂d類段階に併行させておきたい。

一方、近畿北部の鳥浜80R I区では、A₂類とB₁類の折衷的な土器が、東海の清水ノ上I式と共存している。このA₂類とB₁類の折衷的な土器は、系譜的にみて、山陰のA₂a・B₁類段階に対応しよう。こうした点から、A₂a・B₁類段階が清水ノ上I式に併行するものと考えられる。清水ノ上I式は前期初頭に位置することが明らかであり、山陰のA₂a・B₁類の段階や瀬戸内・近畿南西部のA₁a類(一乗寺南地点I式)の段階を、前期初頭に位置づけることができよう。

東海の諸型式を有する近畿南東部では、問題の粟津湖底SZI群土器について、少なくとも石山式以後、羽島下層II式以前の土器とされ、一部清水ノ上I式に併行する可能性がある⁽³³⁾とされる。山陰の上福万の例のように、A₂a・B₁類段階に粟津湖底SZI群土器が共存する可能性があり、併行関係を少なくともこの段階まで考えたい。また、D類は、この粟津湖底SZI群の系譜上にある土器と考えられ、A₂c・A₂d類段階で山陰では盛行し、A₂類の組列上にあるA₂c・A₂d類に文様的な影響を与えたものと想定できる。

なお潮見浩は、近年、繊維土器のうち菱根や宮ノ下にみられる薄手の表裏縄文土器を前期初頭に位置づけている⁽³⁴⁾。しかし、この位置づけに関する根拠は示されておらず、対比された北陸の早期末から前期初頭に関する土器変遷過程も明確ではない。本稿で前期初頭と規定したA～D類土器群が、帝釈峡遺跡群の層位的検討により、繊維土器より後出するものであると認められることから、表裏縄文土器は早期末におさまると考えてよいであろう。早期後葉の石山貝塚に於て若干の表裏縄文土器が伴うことも、この考え方の証左となるであろう。

6 小 結

これまで、縄文時代前期初頭の近畿から中国にかけての土器群について、土器細分による変遷過程の想定を行ない、これら諸地域における土器群の特性を認識してきた。改めて早期後葉を概観してみよう。押型文土器によって形成された西日本の斉一性は、高山寺式の終焉後、早期後葉に至って崩壊に向かう。この時期、西日本各地域における土器群の把握が、最も困難な段階である。関東からは条痕文土器が影響圏を広げ、東海での消化の後、東海とほぼ同様な土器型式が近畿南西部にまで確実にみられる。また、条痕文系土器の出現は、瀬戸内内陸部の帝釈峡にまで知られる。一方、日本海岸の近畿北部や山陰では、宮

近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分

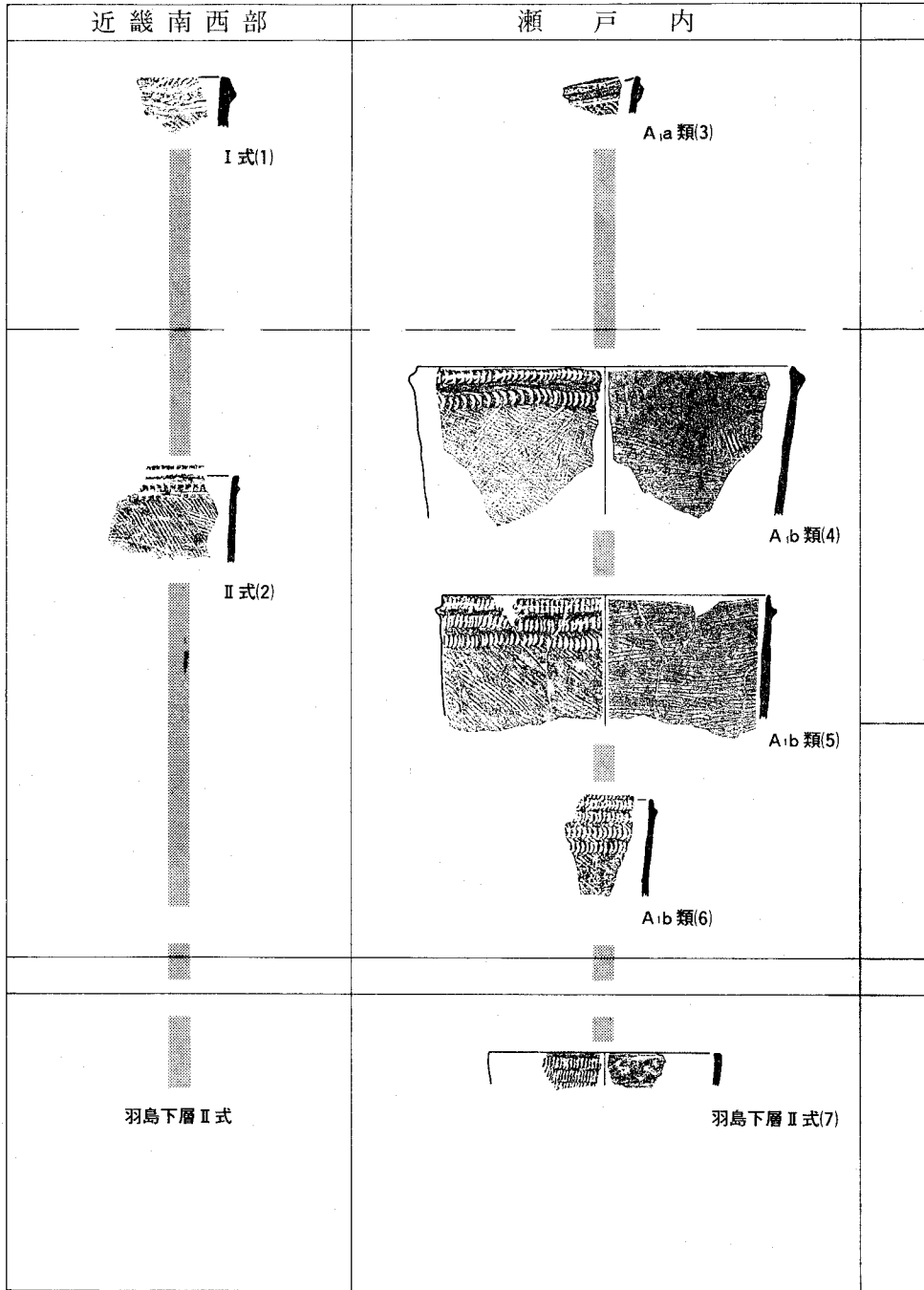
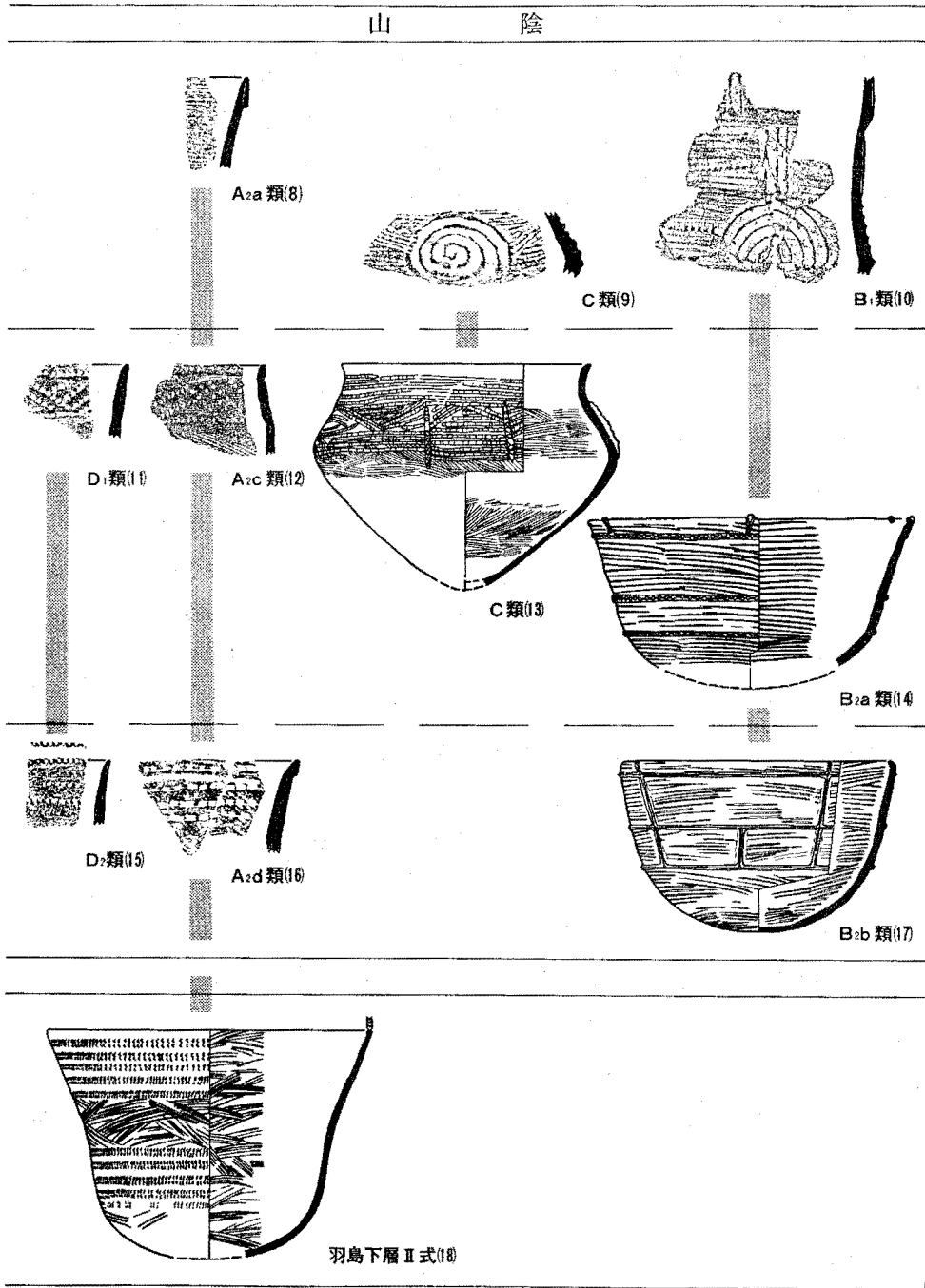


図35 縄文前期初頭土器変遷想定図 (1・2 一乗寺南地点, 3 帝釈峡観音堂, 縮尺 拓影図1/6, その他1/8)

小 結



4~6 大浦浜, 7 羽島, 8・9・12・13 陰田, 10 西川津, 11・14~18 目久美)

ノ下や菱根といった表裏縄文土器が存在する。それ以前には、高山寺式につぐ変形押型文土器や沈線文系の土器群⁽³⁵⁾、あるいは手向山、平椿といった九州系の土器群⁽³⁶⁾が存在している。このように、高山寺式にみられる西日本を包括する広域の地域圏が形成されて後、近畿南部から瀬戸内内陸部にかけて、関東・東海系の条痕土器群の流入、そして、山陰における九州系の土器群の影響ないし、北陸から山陰に至るまでの表裏縄文土器の成立といった、各地域での複雑な様相に一転するのである。このような複雑な土器地域圏のあり方が存続しているのが、本稿で問題にしている前期初頭の状況なのである。

近畿南西部から瀬戸内にかけて分布するA₁類、一方山陰に分布の中心をもつA₂類は、対峙した地域差を示している。同様に分布圏の対峙したあり方は、B類とD類にもみられる。早期後葉以来、近畿南東部を通じて流入した関東・東海の条痕土器の影響圏と同様に、粟津湖底S Z I群の系譜をひくD類は、瀬戸内東部や山陰までの広範な分布が認められる。またD類は、山陰の在地的な土器であるA₂類に文様の影響を与えている。これに対し、早期後葉、九州系の土器群が山陰から近畿北部までみられるが、これと同様な形でB類の分布が表れている。また、B₁類の文様モチーフはC類に影響を与えており、C類は山陰に於て在地的に成立した土器と考えられる。

このような状況は、土器の器形にも反映される(図35)。東海や近畿南西部の条痕土器は平底深鉢あるいは尖底ないし丸底の砲弾形深鉢を呈するが、A₁類も同様な器形をなす可能性が強い。同様にD類も砲弾形深鉢を呈する。あるいは、山陰の目久美にみられるように砲弾形に近いが、口縁が内接する在地的なあり方を示すもの⁽³⁷⁾がみられる。これに対し、山陰を中心に分布するA₂類は、胴部で1度段をなし、外反した口縁を呈するが多い。A₂類の器形はB₁・B₂類のそれと同様であり、A₂類はこれらの器形の影響ないし、その前段階の土器形態の系譜をひいたものと思われる。また、C類も山陰の在地的なあり方を示し、胴部で屈曲し、口縁が内接しながら口唇が外湾気味におわる器形をなす。このような器形のあり方をまとめるならば、以下のようになる。東海・近畿南東部からの瀬戸内までの共通性と、九州から山陰・近畿北部に至る共通性といった対峙した状況が認められる。そして、その中間に介在する近畿南西部から瀬戸内と、近畿北部から山陰が、それぞれ独自の在地的あり方を示している。土器形態に於ても、前期初頭の複雑な土器地域圏の様相が表出しているのである。

前期初頭の錯綜した状況が解消されたのは、羽島下層Ⅱ式の段階である。近畿から瀬戸内・山陰に至る広範な土器地域圏が成立したのである。さて、羽島下層Ⅱ式の成立を東海

小 結

の清水ノ上Ⅰ式に求める考え方があるが⁽³⁸⁾、上記したように、成立の要素を他地域に求めるまでもなく、在来の地域に求めることが可能である。羽島下層Ⅱ式の成立の主体をどの地域におくかは、現在のところ言及を避けるが、最も資料が豊富である山陰の場合、漸移的な変遷過程が追えよう。ただ、A₂d類から羽島下層Ⅱ式にかけては、施文原体の差といったヒアタスが存在する。しかしながら、A₂d類の胴部で1度段をなして立ち上がる器形に於て、胴部上半の平行直線状刺突文帯が、胴部上半の伸長により、羽島下層Ⅱ式にみられる口縁部と胴部の2分割文様帯を形成したと理解することも可能である(図35)。

ともあれ、従来、北白川下層式の安定した土器地域圏に目を向けがちであったが、その前段階である羽島下層Ⅱ式にこそ、早期後葉以来の分散した小土器地域圏が収束され、安定した大土器地域圏の形成があったと考えられるのである。この画期こそ、早期後葉のあり方を克服し、西日本における本格的な前期社会の幕開けを告げるものといえるのである。

本稿に於て、未発表である一乗寺南地点の資料を使わせて頂いた佐原眞氏・泉拓良氏、同じく西川津遺跡の資料を掲載させて頂いた内田律雄氏に感謝致します。また、本稿を作成するにあたって以下の方々にお世話になった。記して感謝します。足立克己、網谷克彦、小原貴樹、恩田清、久保穰二郎、杉谷愛象、高松龍暉、中越利夫、間壁忠彦、森岡秀人、和田長治の諸氏。さらに常日ごろ御教示頂いている泉拓良氏に改めて深謝したい。なお、小論は、昭和60年度奨励研究(A)「縄文時代前期における西日本縄文土器編年と朝鮮樺目文土器編年との併行関係」の一部に負っている。

〔注〕

- 1 泉拓良「調査の成果」滋賀県教育委員会『粟津湖底遺跡調査報告』1984年
- 2 鳥浜貝塚研究グループ『鳥浜貝塚1980年度調査概報』pp.54-61, 1981年
- 3 網谷克彦「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」『鳥浜貝塚1980年度調査概報』pp. 119-130, 1981年
- 4 岡田茂弘「近畿」『日本の考古学Ⅱ』(縄文時代) pp.193-210, 1965年
- 5 吉田哲夫「木鳥系土器群の研究」『考古学研究』第31巻第3号, pp.83-114, 1984年
- 6 福井県三方郡三方町鳥浜貝塚は、現在の行政区画でいえば北陸に属するが、当該期の土器様相は近畿文化圏の一部にあることは明らかである。したがって本稿では、これを近畿北部を代表するⅠ遺跡と規定したい。
- 7 佐原眞「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第7巻第2号, p.58, 1961年
- 8 芦屋市教育委員会『山芦屋遺跡現地説明会資料』1981年
- 9 泉拓良氏より御教示頂いた。
- 10 平安学園『滋賀県石山貝塚研究報告書』1956年
- 11 米原町教育委員会『磯山城遺跡』1986年
- 12 前掲注2文献 図83

近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分

- 13 前掲注5文献 p.85
- 14 河瀬正利「中国山地帝釈峡遺跡群における縄文早期文化の二、三の問題」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』pp.87-106, 1977年
- 15 鎌木義昌・木村幹夫「各地域の縄文式土器—中国」『日本考古学講座』第3巻(縄文文化) pp.188-201, 1956年
鎌木義昌・高橋護「瀬戸内」『日本の考古学II』(縄文時代) pp.230-249, 1965年
- 16 藤田憲司・間壁霞子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号 pp.42-66, 1975年
- 17 前掲注16文献
- 18 間壁忠彦・間壁霞子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 pp.19-20, 図24, 1971年
- 19 松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年」『考古学雑誌』第47巻第3号 pp.1-26, 1961年
- 20 植田真「縄文土器について」米子市教育委員会『陰田』pp.89-94, 1984年
- 21 中越利夫「帝釈峡遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」『広島大学文学部帝釈峡遺跡調査室年報Ⅷ』pp.65-90, 1985年
- 22 前掲注21文献 pp.74-75
- 23 足立克己「出雲の前期縄文土器—竹ノ花遺跡出土の土器を中心として—」『えとのす』16 pp.53-62, 1981年
- 24 小原貴樹「縄文土器」米子市教育委員会『目久美遺跡』pp.25-34, 1986年
- 25 前掲注20文献
- 26 内田律雄「縄文時代」『古代出雲人のくらし展』pp.4-7, 1986年
- 27 前掲注23文献
- 28 太田正康「縄文式土器」鳥取県教育文化財団『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』pp.95-154, 1985年
- 29 宍道正年「後谷遺跡」『鳥根県の縄文式土器集成I』pp.39-44, 1975年
- 30 1984年11月兵庫県城崎郡神鍋山で開催された西日本縄文研究会11月例会の席上、和田長治氏の御厚意により、拝見させて頂いた資料による。
- 31 前掲注2文献。ならびに、網谷克彦氏の御教示による。
- 32 潮見浩「本州西端地域の縄文前期土器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』pp.25-38, 1980年
- 33 前掲注1文献
- 34 潮見浩「帝釈峡遺跡群の繊維土器」『論集 日本原史』pp.865-879, 1985年
- 35 前掲注28文献p.126, 挿図139-6~18。また、中国山地の岡山県新見市青地遺跡や岡山県阿哲郡大佐町戸谷遺跡でもこの種の沈線文系土器が出土している。岡山県文化財保護協会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』) pp.491-503, 523-563, 1976年。さらに、近畿北部の兵庫県養父郡関宮町周辺の遺跡や兵庫県城崎郡神鍋山遺跡に於ても、この種の土器が出土している。
- 36 前掲注28文献の挿図136-10は平椀式土器である。また、鳥取県東伯郡東伯町大法3号墳の墳丘盛土や周濠埋土からは、手向山式土器に近似した土器が出土している。泉拓良「縄文土器」東伯町教育委員会『大法3号墳(三塚ノ谷古墳)発掘調査報告書』pp.13-18, 1979年
- 37 前掲注24文献 図録15 J-9
- 38 前掲注5文献 p.105